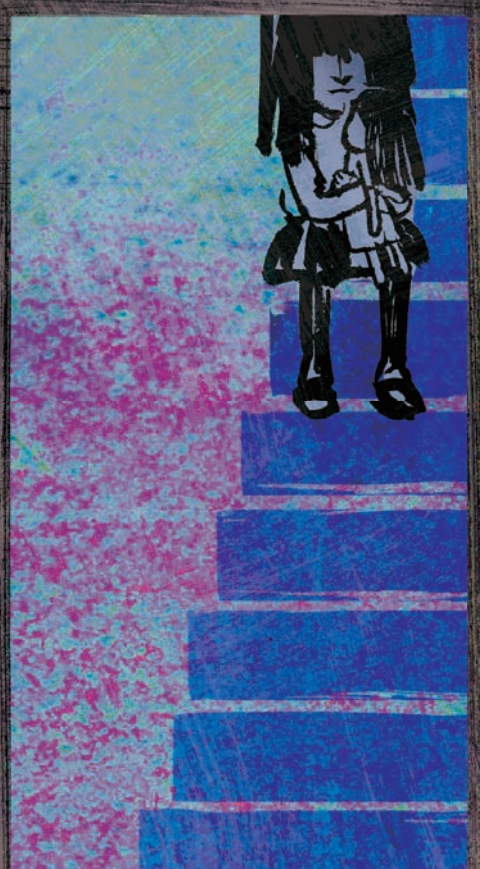
花の回廊

「階段のとこへ戻ったらあかんで」



2007年 新潮社

「Story

昭和32年、十歳になった伸仁は、両親と離れて富山で暮らすことをいやがり、大阪へ戻ってきた。しかし、父・熊吾は外出がちで母・房江も小料理屋で働いているため深夜まで帰らぬうえ、電気も水道も止められている船津橋のビルに伸仁をひとり暮らさせるわけにはいかず、尼崎に住む熊吾の妹・タネ一家に預けられることになった。熊吾に「貧乏の巣窟」と評された尼崎の蘭月ビルにはさまざまな事情を抱えた人々が住み、伸仁は、人の死や傷害事件など、普通では経験することの無い、人間の裏側の世界にもまれながらも強く育っていく。

一方、熊吾が新しく取り組んだ駐車場運営は順調に進み、一家は再び一緒に暮らせるようになる。」

『流転の海』シリーズ

『流転の海』シリーズは、宮本氏のライフワークとなる長編連作である。宮本氏の父、母、そして自分自身をモデルとしているといわれ、物語は主人公の熊吾に関わる個性的な人達を中心に、終戦直後の混乱の中、必死にもがき生きてきた人々の生きざまを描く。舞台は、時代が進むにつれ、故郷の愛媛、新天地を目指して移住した富山、そして再び大阪へと変遷すると同時に、父を中心に描かれる世界から、息子の目を通した物語へとなってゆく。

『流転の海』（流転の海 第一部）福武書店1984年7月・新潮社1992年11月
『地の星』（流転の海 第二部）新潮社1992年11月／『血脈の火』（流転の海 第三部）新潮社1996年9月
『天の夜曲』（流転の海 第四部）新潮社2002年6月／『花の回廊』（流転の海 第五部）新潮社2007年7月
『慈雨の音』（流転の海 第六部）新潮社2011年8月／『満月の道』（流転の海 第七部）新潮社2014年4月
現在、「新潮」（新潮社）にて、第八部である『長流の畔』が連載中。（2015年3月現在）

蘭月ビルの住人たち

蘭月ビルは二階建て。二階へ上がる階段は四か所あり、廊下も複雑に入り組んでいるため、迷路のようになっている。ここに住む人たちも、複雑な家族環境、複雑な人生、複雑な心を持つ人々、まるで迷路のよう。世間から見放された環境で暮らしているにも関らず、伸仁の物おじしない性格がこの住人たちの道を開き、明るい世界が見えてくるような気がした。

Review